箱庭ノ鷹

この仕事に正義はあるのか。――かねてから、そんな疑問を抱いていた。
国家反逆の動きを嗅ぎつけ、逮捕する。それが俺たち警察官の仕事。逮捕された者は専門の施設で矯正を施され、釈放される。
だが、実際に収監された経験のある市民に会ったことがない。少しでも国に疑問を覚えれば即座に逮捕される昨今、国家反逆罪での逮捕数は相当数に昇り、前科持ちは事情聴取で容易に発覚する。だが警察官になって六年、未だ前科持ちに会ったことがない。
漠然とした不信感は抑えてきた。俺が反逆罪で逮捕される側になってしまう。だが、ずっと疑問を抱えたまま誰にも言わないでいるのは難しい。
そろそろ限界かもしれない。そう考え始めた頃、それは姿を現した。
「頼む、トラ。何も訊かずに匿ってくれ」
そう言って俺の家に転がり込んできたのは、『タカ』
数年前から音信不通になっていた、二つ年下の幼馴染だった。

◆

同居生活が始まって三ヶ月。
タカは左腕と右脚に電気コードを繋いだ状態で、俺の用意した朝食を摂っていた。
神経接続によって脳波を受け取り、意のままに動く義肢。それ自体はよく見る代物だが、タカのそれは非常に珍しい。
今から四十年前。大規模国際テロ組織『ＤｏＲＡＣ（ドゥラック）』が世界中に散布した化学物質が人類の生態に多大な影響を及ぼした。生まれてくる新生児の四肢欠損は当たり前で、必然的に義肢の技術が大きく発展。接続部が体の成長に合わせて変化し、手術を必要としない付け外しが可能になった。
俺の左脚も膝から下が義足になっている。俺が生まれた二十八年前には今ほどの技術はなく、定期的な接続部の交換手術が必要だった。十歳の頃、成長型に交換した時は、もう痛い思いをしなくて済むと喜んだものだ。
一方、タカは元々、非常に珍しい五体満足の子供だった。俺が警察官になった二年後に国立科学研究所に就職した時も、まだ四肢は無事だった。
なのに今のタカは、左肩から先の腕、右脚の根元から先が、見たことのない型の義肢で補われている。
交通事故か、それとも――研究所で、何かあったのか。
気になるが、タカが何も訊くなと念押しするので、この三ヶ月間ずっと訊けないでいた。
「ごちそうさま。相変わらず美味しいな、トラの料理は」
俺の名前から一部を取った仇名。幼い頃から変わらないその呼び方が、なんだかむず痒い。
「大したもんじゃないよ。一人暮らしで、必要だから身に着けただけだ」
「それでも立派だよ。俺なんて……いや、なんでもない」
皿を洗う俺の手元に食器を下げて、小さく首を振る。

自分のことは頑なに話そうとしない。ずっとこの調子だ。
「そうだ。布団が狭いのはわかるけど、寝てる間に俺を抱き枕にするのはやめろ。気色悪い」
ふとした様子で言われて、息が詰まる。
確かにこの部屋は一人暮らし用にしても狭く、布団も一人分しか敷けないので、二人で寝るには狭い。
だが俺がタカを抱きしめて眠る理由は違う。寝ている間、苦しそうに泣いてうわごとを言う姿を見ていられないからだ。
俺が抱きしめて、優しく声を掛けて頭を撫でてやると、安心したように泣き止む。小さい頃、夜闇が怖くて泣いていた時と変わらない。
でも、今のタカがうなされる理由は、もっと深くて重いのだろう。
本当の理由を言う気になれず、ごまかしが口を突いて出る。
「最近寒いからな。タカは子供みたいに体温が高くて、湯たんぽにちょうどいい」
「だから、そういうのが気色悪いんだよ」
言葉ほど不機嫌には聞こえない声で吐き捨て、玄関に向かう。義肢の充電は終わったようだ。
タカの義肢は一見して人肌と見分けがつかないし、体温と同じ程度の表面温度を保っている。
国家の中枢に近い上流階級にはそういう義肢も行き渡っているらしいが、俺はタカの義肢で初めて実物を見た。
郵便受けから新聞を取ってきたタカは、早速広げて読み始める。
皿洗いを終え、仕事に出る準備をしようと手を拭いていると、ぐしゃっと軽い音が聞こえた。
「タカ？　どうしたんだ」
タカは広げた新聞紙をしわくちゃに握りつぶして、歯を鳴らして震えている。
「なんでもないよ」
「なんでもないって、お前」
顔を覗き込もうと近寄ると、紙面を隠すように新聞を引き寄せる。
「俺のことはいいから。そろそろ仕事に行く時間だろ、遅刻するぞ」
「あ、ああ。……いってきます」
「ん、いってらっしゃい」
拒絶するような声に何も訊くことができず、俺はサッと用意を済ませて家を出た。
この三ヶ月、せっかくタカと再会できたというのに、どこかぎこちない空気が漂っている。
昔はもっと、気兼ねなく何でも話せるような仲だったのに。
タカはいつも、俺の後ろについてきていた。俺が同い年の友達と遊んでいても入ってきて、ナメられないようにと、俺の真似をして強い語調で喋るようになった。
そういうところは変わっていないけど、それなら今のタカは、誰にナメられないようにしているつもりなのだろう。自分を守るために虚勢を張っている、そんな風に見えて仕方ない。
けど、踏み込むだけの決心はつかない。警官の仕事と同じ、中途半端のまま。
俺が警察官になったのは、小さい頃に

観た刑事ドラマがキッカケだった。
　今はああいう娯楽にも検閲が掛かるが、昔は今ほど厳しい規制はなく、実家にブルーレイという旧式の記録メディアに録画された番組が残っていた。
　時には立場や世間の目も顧みず、自らの信念や正義を貫き容疑者と向き合う刑事たちの姿に憧れた。
　それだけに、幼い頃に目を輝かせて応援した刑事と今の自分を比べると、やるせない気持ちになる。警察上層部や国に対して疑念を抱きながら、何も動きを起こそうとしない。
　刑事ドラマの制作されていた時代の警察は今ほど国の影響が強くなかった。もちろんそれはわかっている。けど、その理屈に甘えて自分の信じる道を見失っているのではないか、そんな不安が捨てきれない。
――だから、その不安が形になったのだ。
　目の前の光景に対して、俺は呑気な感想を抱く。
「動くな！」
　出勤途中だった俺は、署から出動してきた同僚の警官に囲まれていた。ざっと六、七人から、一斉に拳銃を向けられている。
「どういうことだ」
　まだ引き金に指を掛けていないから、威嚇のためだろう。努めて冷静に尋ねた。
「溝呂木寅次郎（みぞろぎとらじろう）。お前には逃亡幇助の容疑が掛けられている」
「大人しく連行されるなら銃を下ろす」
　共に仕事をしている時から感じていたが、やはり彼らは上の言うことに疑問を抱かず、ただ執務をこなすだけらしい。何からの逃亡なのか、彼らも知らされていないのだろう。
　詳しいことはわからないが、俺が手を貸した人物といえば、タカ以外にはありえない。
　訳ありだとは思っていたが、警察に追われていたとは。
　それともタカを追っているのは警察ではなく、警察を動かせる外部の何者かということか。
　この場は従った方がいいのか否か考えあぐねていると、足元で、カランと軽い音がした。
　黒い筒が転がっている。気づいた直後、大量の煙が噴き上がった。発煙筒だ。
　煙たさに咳き込む間もなく何者かに強く手首を掴まれ、腕を引かれる。
「仲間を、呼んだのか……ケホッ」
「ゴホッ、ゲホッ……待て！」
　咳まじりの怒声がすぐに遠くなる。俺は、俺の腕を引いて駆ける後ろ姿に強く問いかけた。
「何がどうなってるんだ、タカ！」
「話は後だ、とにかく走れ！」
　タカが足を止めたのは、静かな工場街に佇む倉庫の一つだった。
「どこだよ、ここ」
「ＤｏＲＡＣが民間の工場街に偽装して稼働してた工場や倉庫だよ。今は使われてない」
　タカは錆ついたシャッターを体がギリギリ通るくらいまでこじ開け、下から潜り込む。
「ＤｏＲＡＣの？　お前、どうしてそん

な場所を知ってるんだ」
　続いて潜り込みながら訊くと、タカは紙きれを差し出してきた。
　新聞の切り抜き。とある科学研究所から、実験動物が逃げ出したと報じる記事。
「これ、もしかして」
「俺が務めていた研究所。……ＤｏＲＡＣの関連施設だ」
　絶句する俺に、タカは縋るような目を向けてきた。
「知らなかったんだ。テロに加担しようと思って就職したわけじゃない。俺はただ、みんなの役に立つ研究がしたくて」
「わかってる、わかってるから。まずは順を追って説明してくれないか」
　埃だらけの床に並んで座り込む。タカは、ぽつりぽつりとこれまでのことを話し始めた。
　四年前、二十二歳で研究所に就職。優秀さを買われて二年ほどで重要な研究に参加するようになった。しかし、そこで行われていたのは――
「ＤｏＲＡＣがどんなテロ行為を働いたのか、トラは知ってる？」
「ああ。世界中に化学物質を散布して、人類の生態に影響を及ぼしたって」
「じゃあ、誰がどうやってそれを解決した？」
「世界中の国家が連携して、義肢の開発、量産化を推し進めた。歴史の授業で習っただろ」
「その国家間の連携が、ＤｏＲＡＣの影響下で成立していたとしたら？」
　思わず息を呑む俺に、タカは訥々と続けた。
「考えてもみろ。世界中を災厄が襲ってる時、他国と連携して解決するか、自国で独自に解決手段を用意して世界の覇権を握るか。前者の国家もあっただろうけど、大多数は後者だ。特に、四十年前の時点で大きな影響力を持っていた先進国は」
「そんな」
「結果的にはそうならなかった。テロを起こした時点で、ＤｏＲＡＣは解決手段まで用意してたんだ。自分で災厄を起こして、解決できるのも自分だけ。奴らのマッチポンプに、世界中がまんまと利用されたわけだ」
　咄嗟に反論しようとしたが、言葉が続かなかった。俺が国家に対して抱いていた不信感に、ぴったりと合致する話だったから。
「当然、俺が務めてた国立研究所も、国家の背後にいるＤｏＲＡＣの利益のための研究を主にしていた。元々関わっていたのは、軍事用の義肢を開発する研究だ。ＤｏＲＡＣの実効支配が充分に進んでいない国を制圧するための兵器を作ってた。そして一年前、この研究所に異動が決まった」
　記事の写真を指し示す。
「ここは義肢やパワードスーツなどの外装部品ではなく、人体そのものを強化する研究を進めていた。俺が大学時代に書いた、遺伝子組み換え技術を応用して人類の四肢を再生する論文が所長の目に留まって、……研究に参加することになった」
「けど、その記事は実験動物が逃げたって……まさか、その動物って」
「そうだよ。この研究所にいた実験台は、

一人の人間だけだ」
「じゃあ、なんでそう書いてないんだよ」
「それくらい、お前だってわかるだろ！」
金切声で叫ぶタカは、追い詰められた表情をしていた。
自分が非道な研究の場にいたことに葛藤している。これ以上語らせるのは酷だ。
「国立研究所の人体実験が発覚すれば国とＤｏＲＡＣの癒着が露見するから、検閲を回避するために濁してある。タカは、国を告発するために逃げてきたのか？」
「買い被るなよ。俺は正義感の強いお前とは違う。怖くて逃げ出しただけだ」
それで、この記事を見て怯えていたのか。捨ててきた過去が追いかけてくるようで怖くて。
だとすれば、きっと。
「タカと同じなのかな、実験台になっていた人も。自分の置かれた環境が怖くて逃げ出した」
「何、言ってるんだよ、トラ」
タカが大きく目を見開き、唇を震わせる。
「まさか、逃走した実験台を助けに行くつもりか？」
俺が頷くと、タカは首が千切れそうなくらい、大きく横に振った。
「ダメだよそんなの。お前の立場はどうなるんだ。憧れだった警察官になれたって、喜んでたじゃないか。たくさん活躍して刑事になるんだって」
「俺が憧れてたのは刑事という立場じゃない。正義を信じ、遂行する魂だ。今の警察に正義はない。それに、もう俺も反逆者の仲間として指名手配されてる。立場なんて今さらだよ」
「けど……」
「それよりもさ。俺だけじゃ、俺の信じる正義を実行に移そうにも、手掛かりも何も掴めない。お前の助けが必要なんだ。力を貸してくれないか」

◇

幼馴染のトラは、正義がこの世に存在していると本気で信じている希少な人間だ。昔も今も変わらない。
俺はトラとは違う。正義なんて概念、端から信じていない。
けど、トラの純粋な瞳に見つめられると弱い。普段は頼れる兄貴分なのに、その時だけは子供みたいで、すぐに脆く崩れてしまいそうに思える。裏切れないと感じる。
「お前も言ってたじゃないか。みんなの役に立つ研究がしたくて科学者になったって」
ほら、今も。俺が咄嗟に口走った偽善を、何の疑いも持たずに信じてしまう。
「――携帯端末は持ってるか」
俺は愚直にも、必死に応えようとしてしまう。
「持ってるけど、通信が使えないように妨害されてると思う」
「それでいい。幸いここは元ＤｏＲＡＣの倉庫だ。ありあわせの機材で『実験体No.9603』に埋められた識別チップを追えるように改造する」
「……ああ。頼むよ、タカ」
トラは絶対の信頼を宿した目で頷き、

俺に携帯端末を渡した。
この先に進めば、自分で自分の首を絞めることになる。
充分にわかっていながらも、トラに追手が来ないかの見張りを頼み、倉庫に放置されたガラクタを漁った。

どうにかNo.9603の位置情報を追えるようにし、もう一つ機能を加えた端末を再起動する。幸か不幸か、さほど離れていない地点にいるようだった。
トラを呼び戻そうとして、シャッターの向こうが騒々しいことに気づく。
話し声と、金属の擦れ合う音――武装した人間の立てる音だ。
「タカ」
耳元で囁かれ、思わず「ひっ」と声を上げた。
「シッ、静かに。追手が来るのが正面から見えたから、別の出入り口を探して入ってきたんだ」
振り返ると、トラが唇に人差し指を当てて俺の横に屈んでいた。
「驚かすなよ。……まあいい、ちょうど位置情報も掴めたところだ」
「ああ、逃げるぞ」
トラが俺の手を取り、引っ張り上げる。ここに逃げ込んだ時とは逆にトラが俺の腕を引いて、彼が見つけた裏口に駆けていく。
別に今は手を引く必要ないんだけど。言おうとして寸前で呑み込んだ直後、
「動くな！　大人しく投降しろ！」
激しい音を立ててシャッターが壊れた。
フルフェイスの仮面と各種武装、全てを白で統一した集団が乗り込んでくる。ＤｏＲＡＣ直属の兵士だ。
「裏だ、回り込め！」
「急ぐぞ、タカ！」
兵士の怒号とトラの声が重なる。外に出た時には足音がすぐ近くに迫っていた。
このまま逃げても捕まるだけ。できれば温存しておきたかった手段だが、この際、仕方ない。
俺はトラの腕を振り払い、自分より一回り大きいその体を左腕でひょいと抱え上げた。
「しっかり掴まってろ。……変なとこは触んなよ」
「は？　急に、何を」
戸惑うトラが声を止める。俺の右脚が、異様な形に変形し始めたからだ。
機械が剥き出しになり、膝は獣のような逆関節、足裏にはキャタピラが出現。
ギャリギャリギャリッ！
右脚だけで立つと、耳障りな音と共にキャタピラが駆動。
俺とトラを、勢いよく前へと運び始めた。兵士の銃撃音が、どんどん遠ざかる。
「な、なんだよこれ」
「研究の成果みたいなもんだ。今は黙ってろ、舌ぁ噛むぞ！」
目撃情報を当たったのか、逃げる先々で白い兵士とすれ違う。
市街地を経由した方が人ごみで振り切りやすいかもしれない。逃走経路を頭の中で組み立てる。
しかし、なんと仕事の早いことだろう。
埋め立てでできたこの工業地区から市街地に繋がる唯一の橋が、今まさに、

中央から二つに分かれて、跳ね上げられようとしていた。
　本来は船舶との衝突を避けるための可動橋。だがここは元ＤｏＲＡＣの工場街だ。脱走者を追う事態も想定して、外からの道を絞っているのだろう。
「跳ぶぞトラ、歯ぁ食い縛れ！」
「跳ぶって、お前」
　喚くトラに構わず、斜め三十度ほどになった橋を駆け上がる。四十五度、六十度。どんどん急勾配になる橋の上で、逆関節の膝を、バネを押し縮めるように曲げていく。
「３、２、１、――ゼロ！」
　斜め七十五度になったところで端に達する。膝を伸ばし、溜めた力を一気に解き放って――俺とトラは跳んだ。
　トラは今にも叫び出しそうな形相で、しかし忠告した通り歯を食い縛って耐えていた。
　目測あと十メートル。五メートル。二メートル。橋の向こう側は迫っているのに、慣性だけで飛び出した二人分の体は空気抵抗で失速、最後の一メートルが遠い。
「もう、ちょっと……よし！」
　右足で着地、キャタピラを逆回転させてブレーキをかけつつ滑走する。
　橋が戻るまでは追手もこちら側に来られない。右脚を元の形に戻し、トラを地面に降ろす。
「まだ距離を取った方がいい。走るぞ、トラ！」
　トラは未だ当惑した様子で、共に逃げるには心許ない。俺は彼の手首を強く掴み、走り出す。
「タカ。さっきの、なんなんだよ」
　人目につかない道を選んで歩く道中、トラが声を潜めて尋ねてきた。
「言っただろ、軍事用の義肢を開発する研究に参加してたって。民間人に見せかけて奇襲するための機構を施した、兵器の義肢だ」
「けどお前、腕も脚も揃ってたはずだろ。それじゃ、まるでお前が」
「……それより今は実験体の救出だ。No.9603は郊外の住宅地を移動してる。ここから近い」
　多少わざとらしいとわかっていても、先を続けさせたくなくて声を遮る。
「ああ、……ひとついいか」
「なんだよ」
「そのナンバーなんたらっての、やめないか。その人にも名前があるはずだろ」
「実験体の本名なんて、知らない方がいい」
　トラの信頼を裏切りたくないのに、過去の所業が追いかけてくる。
　その不安に、これ以上耐える自身がなかった。
「やめにしないか、こんなこと」
「どうしたんだよ、今さら」
「今なら、脅されて協力していたと証言すれば、お前は罪に問われずに済む。今さらじゃない。今だから訊くんだ」
　トラの綺麗な瞳に、薄汚い世界を映したくない。
　それに、既に薄汚く染まった俺の本質を知れば、トラはきっと失望する。
　彼の中でだけは、綺麗なままの自分でいたい。小さな望みが、この逃避行を押

し留めようと膨らむ。
「ごめん、タカ」
聞こえた声に、思わず足を止めた。
「なんで、トラが謝るんだよ」
「タカの気持ちも考えず、俺の考えを押し通そうとしてたから。お前の意見も聞くべきだった」
違う。俺に自分の意見なんてない。トラに失望されたくなくて流されていただけだ。
そして今度は、トラに失望されたくないから突き放そうとしている。
「……俺は、正義を信じるトラのことが好きだよ」
なんて自分勝手だ。思いながら、嫌われたくない一心で心にもない言葉を並べ立てる。
「けど、俺には信じる正義がないから、たまに眩しくて立ち止まっちゃうんだ。そんな時は、無理にでも引き上げてほしい。……ただのワガママだし、トラの負担になるだけだから、嫌になったら見捨ててくれて構わないけど」
「見捨てるわけ、ないだろ」
トラは顔を歪めてそう言った。
「タカ一人に重荷を背負わせるなんて絶対しない。お前がついてきてくれるなら、俺は全力で引っぱっていく。さっきタカが、俺を抱え上げて跳んでくれたみたいに」
「そんな、物理的な話じゃないんだけど」
優しさにつけ込む痛みを苦笑いに隠して、改造した携帯端末を差し出した。
「俺はこの辺りの地理に疎いから、トラが持ってて」
「ああ。この赤い点を追えばいいのか？」
元の電子地図はＧＰＳで位置情報を把握する仕様だが、人工衛星はＤｏＲＡＣ管理下なので使えない。
技術水準も精度も落ちるが、識別チップの発する電波を受信する仕様に改造してあった。
「電波の発信は、予期せぬ事態への保険に過ぎない。距離が離れたり、時間が経ってチップの内蔵電源が切れれば追えなくなる」
警告すると、トラは気が逸った様子で頷いた。
「そうだな。研究所や組織の連中も位置情報くらいは把握してるはずだし、先を越される前に急がないと」
「先を越される、か。……多分、それはないと思うけど」
思わず呟く。「どういう意味？」と尋ねるトラに、小さく首を振った。
「なんでもない。ほら、早く案内しろ」

◆

タカに急かされて端末の画面に目を落とし、簡素な地図を把握する。
「家と家の隙間みたいな道を、少しずつ移動してる」
俺が言うと、タカは頷いて歩き出した。
「人体実験をするような施設の追手は、一般市民のいる場所で堂々と動けない。その前提の上で、子供しか通れない道を選ぶ。相変わらず頭の回る奴だ」
タカはその人のことをよく知ってるのか。しかも子供って。
言いかけたが、やめた。すぐにわかることだし、余計に神経を磨り減らしてほ

しくない。
「タカ、住宅街はそっちじゃないぞ」
「あ、……前はこの街に住んでたのに、すっかり忘れてるな」
タカを先導し、赤い点を追う。道中、幾度か警官の姿を見かけて迂回した。
組織が警察に根回ししているのか、指名手配犯の俺を追っているだけなのか。
どちらにしろ、捕まるわけにはいかない。
「この先だ。けど……」
二軒並んだ家屋の外壁の隙間。地図の印はその奥を示していた。
「俺は、通れそうにないな」
隙間と見比べるように、俺より二回りほど小柄なタカを見る。
「いや、俺も無理。流石に狭すぎる。裏に回り込もう」
タカが静かに駆け出す。俺も反対側に回り込み、左右から待ち構えた。
慎重に押し殺しているような足音が近づいてくる。壁の隙間から顔を出したのは――
ボサボサの茶髪が背中全体を覆った、タカよりも小柄な少女だった。
左右を確認しようとしたのだろう。少女が俺の方を向き、顔を強張らせる。
意外な風貌に度肝を抜かれた俺は、咄嗟に動くことができなかった。
少女が顔を驚愕と憤怒に歪め、拳を突き出してくる。
「止まれ、実験体No. 9603」
タカが声を掛けた途端、拳は俺の胸板に衝突する直前で止まった。
少女がタカを振り向く。その顔が強張っていることに気づき、対応を迷っていると、
「何してる、取り押さえろ！」
取り押さえる？　こんな華奢な少女を？
疑問が頭を掠めるも、仕事柄、反射的に体が動く。地面に押さえつけず羽交い絞めにしたのは、加減を間違えれば怪我をさせてしまいそうだからだ。
「離せ！　こいつと同じ施設の連中か？　貴重な実験台に手荒な真似していいのかよ！」
「俺は施設の関係者じゃない。落ち着いて話を聞いてくれ」
「だったら警察かＤｏＲＡＣの追手だろ！　そうじゃなきゃ、こいつと一緒にいるはずない！」
少女は興奮した様子で叫びながらも、一心にタカを睨んでいる。
「こいつは確かに君のいた施設の人間だけど、今は君を助けるために協力してる。信じてくれ」
「嘘だ！」
少女が俺の声を遮り、静かになる。
「あんた、まさか知らないのか」
首を後ろに向け、信じられないものを見るような目で俺を見る。
「奴は、あたしを利用した人体実験を主導した科学者だ。あんた、騙されてんだよ」
「は？　……嘘だろ、タカ」
思わず、縋るようにタカを見た。
タカは歯を食いしばって、今にも泣きそうな目をして俯くだけだった。
その顔を見て、ふと気づく。ここまでタカは俺に何か言いかけ、その度に言い淀んでいた。その理由は――

「ごめん、トラ。やっぱり俺は、お前と一緒にはいられないみたいだ」
思い詰めた顔をしたタカが俺たちに背を向け、駆け出した。
「おい、待てよ！」
「放っとけよ、あんなクズ野郎」
自分を害する存在が失せたからか、落ち着いた声で少女が言う。その直後、
「いたぞ！　手配犯の一人と保護対象だ！」
耳に届く怒号――数人の警官がこちらに向かってくる。保護対象というのはおそらく少女のことだ。施設側が、人体実験の事実を隠して警察に伝えたのだろう。
俺は咄嗟に少女を地面に下ろし、手を取った。
「おい、何すんだよ！」
「とにかく、今は追手から逃げるぞ」
少女の手を引いて走り出す。速く走りすぎたかと思って一度振り返ったが、少女は意外にも俺の歩幅と速度についてきていた。
住宅街から再び市街地に向かい、入り組んだ道を選んで歩くと歓楽街に出た。
表向き歓楽街と名がついてはいるが、実態は違法薬物の取引や人身売買、義肢の転売や闇医療が横行する、いわば裏の街だ。
取り締まってもいたちごっこにしかならず頭を悩ませていた区域だったが。
「まさか俺が、この区域に助けられることになるなんてな……」
「わけわかんないこと言ってないで、手ぇ離せよ。あんたから逃げるつもりはない」
「そんな心配してないよ。この辺りは危ない人も多いし、迷子にならないように」
「子供扱いすんな！」
少女が俺の手を振り払う。
交番勤務時代の迷子対応と同じに接してしまったが、そういえばこの子は何歳なのだろう。
「あんた、これからどうするんだ。あのクズ野郎やあたしと一緒にいたなんて知れたら反逆罪じゃ済まないだろ」
「もう指名手配されてるから、俺も逃亡中の身でな。元は警察官だったんだけど」
「国家の犬かよ。道理であんなのと一緒にいるわけだ」
ムッとして言い返そうとしたが、何も言葉が出てこない。
「とりあえず、落ち着いて話せる場所を探そう」
周囲を見回した時。ポケットに突っ込んでいた携帯端末が震え出した。
役目は終わったのに、どうしたのだろう。訝しく思いつつ画面を見る。
『メッセージをきく』
見慣れないシンプルな画面に、そんなタッチボタンだけが表示されていた。
メッセージ。この状況で考えられるのは。そう思って画面に触れる。
『このメッセージを聞いてるってことは、俺がヘマして警察か組織に捕まったってことだな。――トラ、巻き込んでごめん。俺はトラみたいに強くないから、信念を貫くより、長いものに巻かれて生きることを選んできた。きっとそのツケが回ったんだ。
久しぶりに会ったトラが変わってなく

て、嬉しかった。俺のことなんか忘れて、いつまでも正義を信じるお前のままでいてほしい。……それと、もしそこにNo.9603がいるのなら、こう伝えて。「俺の身代わりに差し出して、本当に悪いことをした」って』

メッセージが途切れ、画面がブラックアウトする。

「どういうことだよ。身代わりって」

「奴の研究には、五体満足の若い人間が必要だった。最初は奴自身が被験体になるはずだった。奴はそれを怖れて、自分で右腕と左脚を切断した」

絶句する俺に構わず、少女は忌々しげに続けた。

「当然、そんな工作すぐにバレる。見せしめとして軍事用の義肢の試験運用に使われ、加えて研究の実験に使える人間を探すことになった。それで差し出されたのがあたしだ。奴の率いる施設の工作員に掴まって拉致されてな。元いた場所はここより酷いスラムだし、戻りたいとは思わないけど。あんな実験のために生き永らえるくらいなら、死んだ方がマシだ」

タカの義肢兵器を目にした時、言いかけたこと。

――それじゃ、まるでお前が実験台みたいじゃないか。

少女の証言で裏づけられてしまうのが怖くて、思わず尋ねた。

「実験台の君が、何故そこまで知ってる？」

「手足は揃ってても健康状態じゃ奴に劣るから、いいデータが取れないって、職員にぐちぐち言われてたんだよ。これ以上不調が増えたら使い物にならなくなるからって、暴力は振るわれなかったけど、そうでなきゃ散々殴られてたと思う」

「……ごめん、嫌なこと思い出させて」

「謝るなよ。それより、これから」

少女が言いかけた時、――発砲音が響き、右腕に一瞬、重く熱い痛みが走った。

「なんだ、てめぇら！」

少女が叫ぶ。俺と少女を挟むように、二人の男が立っていた。

「間違いない、お偉いさんが言ってた二人だ」

「アンタらにどういう事情があるかは知らんが、こっちも金が必要なんでな。――ガキの方は生け捕り、男の方は生死問わず、だったか」

この街の住人にしては小綺麗な身なりから、人身売買業者だと直感する。既にこんなところまで根回しされていたとは。

「大人しくすれば、二人とも生け捕りってことにしてもいい」

「ふざけんな！　おい、逃げるぞ！」

「いや、逃げるったって」

左腕を引かれ、駆け出す。

少女に当たるとまずいからか男たちは発砲しないが、このままでは――

「俺のことはいい、キミだけでも逃げろ！」

「バカ言うな、オッサン一人じゃ身を護れないだろ！」

「いや、キミの方こそ……」

少女の手を振り払おうとした刹那。

俺と少女の距離が離れたからか、追手の一人が銃撃した。

まず少女には当てないだろうが、下手に躱せばその限りではない。
咄嗟に判断をしかねる一瞬の隙が、
「あたしの方こそ、なんだって？」
命取りに――なる、ことはなかった。
少女が握った拳をほどく。銃弾が虚しい音を立てて地面に落ちた。
思い至る。少女が受けていた人体実験とは、こういうことだったのだ。
「ぼさっとすんな、やられるぞ！」
少女が再び駆け出すのに合わせて俺も走る。あえて人通りの多い道を選んで追手を撒いた。
「あたしはこんなだから、下手に追手をけしかけても返り討ちにされるだけになる。だから、国にとって生きても死んでも変わんない奴らに任せたんだろ」
走りながら独りごちるように呟くと、少女は俺の返事を遮るように畳みかける。
「で、あんたはどうする？　今は逃げきれても、近場にいたんじゃ、同じことの繰り返しだ。どっか遠くに逃げるか？」
「そうだな、君も一緒に」
「……あたしは無理だよ、もう」
「いや、絶対に見捨てない。……君だけじゃなく、タカのことも」
塀と塀の隙間の薄暗い小道で立ち止まる。少女は大きく目を見開き、牙を剥いた。
「まさか、あのクズを助けに行くつもりか？」
「もちろん、タカが君に酷い仕打ちをしたことはわかってる。だから俺一人で行くよ。けど」
「放っときゃいいだろあんな奴！　なんでわざわざ、危険を冒してまで」
「俺はタカの気持ちをずっと無視してた。俺の信念に寄り添ってくれることに甘えて、タカが俺との考え方の違いに苦しんでることに、気づけなかった」
持ち前の正義感が、普通の価値観とはズレているのだと、幼い頃から気づいていた。
周りとのギャップに苦しむ俺を、タカはいつでも隣で見守ってくれた。だから再会したタカにも、俺と同じ正義を信じる心が残っているのだと妄信して、その役割を求めていた。
けど、タカは俺との価値観の違いを理解していて、必死に俺の価値観を受け入れようとして、苦しんでいた。俺はそれを、タカが過去の所業に苦しめられているのだと勘違いしていた。
本当は、過去の所業を悪だと断罪するような俺の正義感に苦しんでいたのに。俺が、タカを追い詰めたのに。
「自分と違う価値観を認める勇気。それをタカは持っていて、俺は持っていなかった。だから、あいつの過去を受け止めて一緒に進んでいく覚悟を見せなきゃならないんだ」
「あんた一人じゃ、ろくに身も守れない。それに、腕を怪我してるだろ」
言われて、今さらながら痛みを自覚する。鈍く熱を持ったような腕の感覚に顔を顰めそうになるが、痛みを見せないように顔を上げ、まっすぐ少女の目を見据える。
「それでも行く。君はここで待ってて」
「待たない。せいぜい、男同士で愛の逃避行でもなんでも勝手にしてろ」

「ああ、――タカは、女の子だよ。着飾らないし、あの喋り方だから、よく間違えられるけど」
くぅっと、少女の目が面白いくらいに見開かれる。
「そうかよ。けど、あたしには関係ないことだ。あんたとも奴とも金輪際、関わらないからな」
決まり悪そうに舌打ちをして走り去る少女の背中に、声を投げた。
「それでも俺は、タカを助けたら君を探しに行く！　言っただろ、絶対見捨てないって！」
少女は振り返らない。小さくなっていく背中から視線を外し、意識を切り替える。
タカの行方の手掛かりはないか。ダメ元で携帯端末を取り出すと、紙きれが一緒に出てきた。件の研究所の新聞記事。タカが務めていた、少女が囚われていた研究所。
タカが警察に捕まったのか、施設や組織の者に捕まったのか、どちらかはわからない。
しかし後者だとしたら。失敗の見せしめとして研究員を実験に使うような組織だ。ただ収監するだけではなく、研究所に閉じ込めて何らかの研究に利用する……充分あり得ることだ。
希望的観測でしかないが、今はそれに賭けるしかない。ここがダメなら別の場所を探すまで。
自分の意志を確認するように頷き、俺は再び走り出す。

◇

静かな地下空間。時計もない独房。
ここに連れられてきて、どれほどの時間が経ったのかもわからない。
気が狂いそうだ。No. 9603 はこんな孤独に耐えていたのか。思い知ったところで何ができるわけでもなく、ただ思案に耽る。
トラに残した伝言。俺のことは忘れて、という言葉は本心のつもりだったけど、思い返せば未練がましい。追いかけてきてと願っているようなものだ。
けど、トラが俺を探したところで、ここがわかるわけもない。
俺が勤めていた研究所くらいは当たったかもしれないが、ここはもっと、程度の低い研究を行う場所だ。
使い捨ての労働力や、テロ行為のための自爆兵士を製造する工場。使われるのは主に、国家反逆罪で捕まった犯罪者……というのは方便で、実際には使い捨てるのにちょうどいい人間を見繕って罪をでっち上げ、警察に逮捕させる。実験台はいくらでも補充できるのだ。
No. 9603 のような、唯一無二の実験台は恵まれている方だ。彼女のように重宝されることもなく、洗脳され、使用目的に応じて粗末な機械を埋め込まれ、使い捨てられる。
それが、俺に待ち受ける末路だ。
――思い返せば、空虚な生涯だったな。
生まれ育った場所をずっと窮屈に感じていて、圧し潰されないように虚勢を張っていた。
自分の生きる道を自分で切り開きたくて、世の中を変える技術を生み出す科

学者に憧れて。周りと差をつけようと必死に勉強して、大人になって、念願の科学者になって。
けど、いざ蓋を開けてみれば、自分より才能に劣るオッサンたちから、若い女というだけで下に見られる日々。
窮屈さが日に日に増して、虚勢を張るのにも疲れてしまって、そういう時に思い出すのは、あれだけ忌避していたはずの生まれ故郷だった。
トラの後ろについて回って、いつも一緒に過ごしていたあの頃の思い出を、宝物のように、何度も何度も胸の中から掘り起こして、その度に大事に埋め直して。
束の間の安心感と引き換えに、あの頃にはもう戻れないという事実と、あの頃に戻りたいと願っている自分に絶望した。
静かな空間に足音が響き、近づいてくる。とうとう順番が回ってきたか。そう思っていたが、少しして何かがおかしいと気づいた。
俺を連れていくなら数人の職員で事足りるはずなのに、足音が多すぎる。悲鳴や怒号が連鎖して、足音は少しずつ減っていった。やがて、二つの足音だけが響き渡り――
「――タカ、無事か!?」
懐かしい顔の青年――溝呂木寅次郎が、勢い込んで駆けてきて、鉄格子を引っ掴んだ。
「トラ、どうしてここに……」
「この子が、心当たりのある場所を挙げてくれたんだ」
トラの背中に隠れるようにしてこちらを覗き込んでいるのは、No.9603だった。
確かに彼女は、他の実験台よりも手厚く保護されていて、組織の内部事情も研究員の愚痴で知っていたけど。俺の疑念が伝わったのか、少女は不機嫌そうな表情で言った。
「あんたを助けようと思ったわけじゃない。あたしにも事情がある。こいつと利害が一致しただけだ。……二人とも、どいてろ」
彼女の言い分に、一つ思い当たる節があった。
確かに、彼女が俺を助けることには明確なメリットがある。
俺とトラが鉄格子から距離を置くと、俺の義肢兵器でもびくともしなかったそれを、少女はいとも容易く蹴り壊した。ここまで身体強化が進んでいれば、脱走もするはずだ。
束の間の自由だと、理解していたとしても。
トラが俺の手を取り、少女を先頭に駆けて地下を脱出する。
地下通路もエレベーター内も、施設職員がまばらに倒れていた。元より、多くの人員が回される施設ではない。少女とトラが無力化したのであれば、逃走自体は容易いだろう。
扉が開き、地上に出る。倒れた職員を避けながら迷わず通路を駆けていた、その道中。
少女の体がふらりと傾ぎ、急に失速。ぶつかる寸前で慌てて立ち止まる俺とトラの目の前で、前のめりに倒れた。痛みに声を上げるでもなく、荒い呼吸を繰り返す。

「おい、どうしたんだ！」
　トラが屈み込んで呼びかける。答える気力も残っていない様子の少女に代わり、俺が答えた。
「実験体No.9603には識別チップの他に、脱走時の保険がもう一つ備わってる。特殊な薬液を継続的に注射することで体を保ち、その薬が切れると徐々に肉体が崩壊するんだ」
「じゃあ、その薬を注射すればいいんだな？　この施設にもあるんだろ？」
「ここにはないし、一度でも薬が切れると、再度注射したところで手遅れだ。肉体の崩壊は、止められない」
　俺を見上げるトラの顔が絶望に染まる。
「じゃあ、それをわかっててこの子は……」
　無力感に打ちひしがれた、弱々しい声で呻く。俺は、そんな彼の襟ぐりを引っ掴み、
「お前の正義はその程度か？　こんなところで諦めるような奴は、俺の憧れたトラじゃない！」
　真正面から彼の目を見据えて、大声で怒鳴りつけた。トラの目が、大きく見開かれる。
「俺に恨みしかない実験台が、なんで俺のことを助けたと思う？　なんのメリットがある」
「……タカなら、どうにかできるのか？」
　泣きそうな顔で、震える声で言うトラに、力強く頷いて見せる。
「忘れたか？　俺が彼女の実験を主導してた科学者だって。五体満足とはいかないけど、命を永らえさせるくらい、やってみせる。トラは俺の言う通りに動け！」
　俺が手を離すとトラはしっかりと足を踏ん張って立ち、自分と俺を鼓舞するように、快活に笑ってみせた。
「ありがとう、タカ。やっぱりお前は、最高の妹分だ」
「トラだって。……それでこそ、俺の初恋泥棒だよ」

※

　目を開けると、眩い光が飛び込んできた。
　すぐには目が慣れなくて、一度開いた瞼を細める。視界に二人分の人影が映った。
「あ、目が覚めたか」
「あんたは……トラ、だっけ。どこだよ、ここ」
　近くにいた方のオッサンに訊くと、知らない地名が返ってきた。生まれ育った場所からも、囚われていた研究所のある場所からも遠い町だということが、なんとなくわかった。
「そっか。けど、なんであたしは……」
　尋ねかけた時、少し遠くにいた若い方が近づいてきた。
「……あんたに助けられたってことか」
「借りを返しただけだ。君がトラに協力したのも、そういう打算があってのことだろ」
　不穏な空気を感じたのか、オッサンが間に入ろうと口を開く。それを若い方が手で制して、
「君が実験台として重宝されていたの

は、四肢が揃っていたからだ。けど今の君は腕や脚だけでなく、臓器の一部までも機械で補っている。組織や警察も、わざわざ労力を割いてまで君を捕獲するメリットがなくなれば、積極的には追ってこない」
「ふぅん。それで、ここなら安全だから一緒に暮らそうってわけか」
奴は控えめに頷くと、何か言いあぐねている様子で口をもごもごさせた。
「ほら、タカ。この子が目を覚ましたら、ちゃんと言うって決めてただろ」
「わかってるよ、トラ」
不貞腐れたように口を尖らせたあと、あたしの方をまっすぐに見据えて、
「今までのこと、本当に悪かったと思ってる。ごめんなさい」
非道な科学者にはあまりにも似合わない言葉を吐き、頭を下げた。
「謝って済むことだとは思わないし、許してほしいとは言わない。けど、これからはちゃんと君のことを知って、しっかりと向き合っていきたいと思ってる。だから、その」
はにかむように口ごもって。それでも、すぐに顔を上げて。あたしの目を、まっすぐに見る。
「――君の名前を、教えてほしい」
「……そういう時は、まず自分から名乗るもんだろ」
聞こえるか聞こえないかくらいの声で返すと、奴はホッとしたように顔を上げる。
「俺――ううん、私は、鷹乃杜（たかのもり） 愛（あい）」
「あたしは、鯉川（こいかわ） 燐（りん）　……これから毎日、恨みごと言ってやるから。覚悟しろよ」
嫌味のつもりで言ってやったのに、愛が救われたような表情で微笑むのが、なんだか癪で。
一瞬だけ合った視線を、すぐに逸らした。